

YOKOHAMA 60's PRISM

■ 街をデザインする

山崎 洋子



横浜の都市づくりにかかわってきただけでなく、近藤悦朗撮影
横浜市長の国吉さん

横浜市都市づくり 飛鳥田一雄市長時代の1960〜70年代、「自治体としての自立をめざす運動」として企画調整室(後に企画調整局)を中心に始まる。みなとみらい事業をはじめ、ベイブリッ

ジ、港北ニュータウン、地下鉄事業などいわゆる6大プロジェクトを構想・着手し、横浜市の景観づくりをスタートさせた。

80年代は細郷道一市長がみなとみらい事業、ランドマー

クタワーなどの実現に尽力した。

90年代の高秀秀信市長時代には赤レンガパークや自動車道、日本大通りなどの歴史的景観整備も加え、横浜の魅力さらに充実させた。

だが忘れてはならない。67年前の1945年、ここは米軍の大空襲による無残な焼け野原だった。長い間、接収もされ、景

観どころではなかった。横浜市民として自慢できることはと訊かれたら私は迷わず街の景観を挙げる。みなとみらい、赤レンガ倉庫、大磯橋、山下公園、山手、ベイブリッジと海を抱いて連なるスポット、銀座並木とクラシックビルの日本大通り……街の歴史を偲びながら毎日でも歩きたい。

「伝統」積極的に活用

「僕が市役所に入ったのは1971年。横浜は東京の後背地という位置づけでしかなかったですね。でも飛鳥田市長のもとで、田村明さんが都市づくりプランを始めていました」

そう語るの都市デザイナーの国吉直行さん(66)。横浜の景観を創り上げてきたキーマンの一人である。その頃、日本ではまだ街をデザインするという概念がなかった。都市設計の専門職も前例がない。

国吉さんは、同じく都市設計

の専門職として入った岩崎駿介さんと一緒に、2人だけの都市デザインチームを立ち上げた。お手本はどこにもない。当時はこの都市も古い物を壊し、新しい物を作ることに重点を置いていた。高度経済成長期に入っていたし、日本全体が「敗戦後」という惨めなイメージから脱したかったのかもしれない。

しかし国吉さんたちの考えは違った。なによりも横浜の歴史と文化を継承し、それを生かして発展させた街づくりを企画。さらに広い横浜は場所によって個性が違つ。中華街、元町、馬車道、伊勢佐木町……地元の思いも異なる。その思いを優先し、応援していくと決めた。

こうして伝統を伝える赤レンガパーク、モダンなベイブリッジ、みなとみらい、郊外の整った住宅地などが誕生し、横浜の顔である関内も美しく生まれ変わった。歴史的建造物は保存するだけではなく活用した。例えばバルコニーが印象的な旧第一銀行の建物はヨコハマ創造都市センターとなり、多くの市民がイベントなどに使用している。2人でスタートしたデザインチームも82年には都市デザイン室となり、他都市から注目を浴びる存在となった。歴代の市長もデザイン室の取り組みを重視し、後押ししてくれた。

が、すべて順調だったわけではない。街づくりには遺跡、港湾、建築など、いろんな部署がからむ。誰もがデザイン室の意向に賛成してくれるわけではない。時にはトップから「NO」が出ることもある。一例が、私の大好きな、みなとみらいの「汽車道」。廃線になった臨港貨物線の線路を活用した遊歩道だ。線路は滑るから危ないといつので市長が反対した。だがあきらめずに粘るうち、他都市に事例があるのを見つけた。それでようやくオーケーが出て、あの魅力的な「道」が生まれた。

都市デザインの専門家として行政で40年間活躍した国吉さんのような例は、まだこの自治体にもない。市役所を退任した現在は、横浜市立大学で教鞭をとるほか、国内外の講演などに引っぱりだこだ。前例のない横浜の街づくり。市民も行政もこれを誇りとし、大事に引き継いでいくべきだろう。